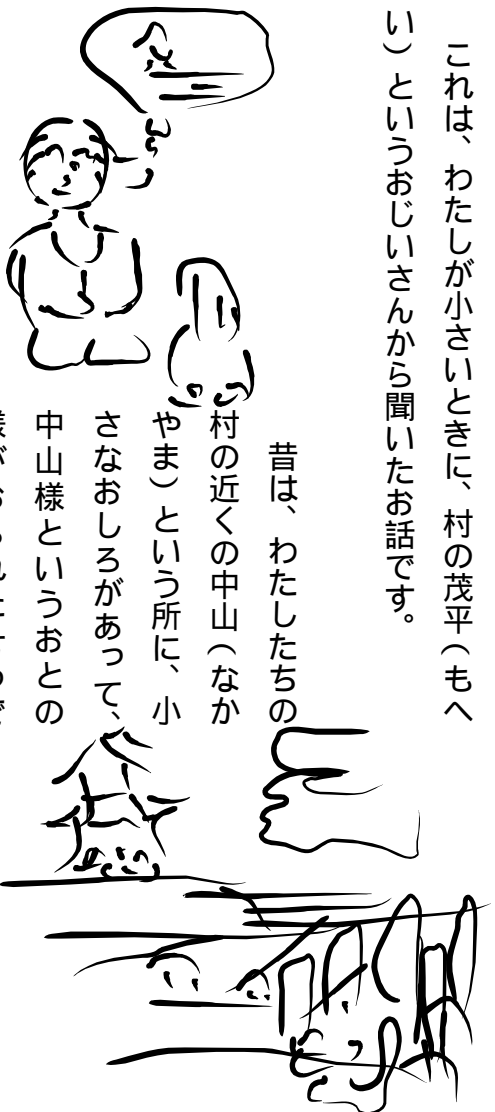


ごんぎつね

新美南吉（にいみなんきち）作

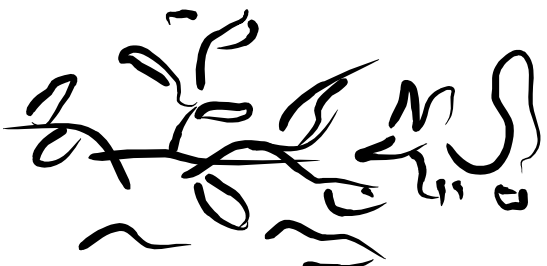
—

これは、わたしが小さいときに、村の茂平（もへい）というおじいさんから聞いたお話です。



昔は、わたしたちの村の近くの中山（なかやま）という所に、小さなおしろがあって、中山様というおとこの様がおられたそうです。

その中山から少しはなれた山の中に、「ごんぎつね」というきつねがいました。ごんは、ひとりぼっちの小ぎつねで、しだのいっばいしげった森の中に、あなをほって住んでいました。そして、夜でも昼でも、辺りの村へ出てきて、いたずらばかりしました。畑へ入っていもをほり散らしたり、菜種がらのほしてあるのへ火をつけたり、百姓（ひやくしよう）家のうら手につるしてあるとんがらし（とつがらし）をむしり取っていたり、いろんなことをしました。





ある秋のことでした。二、三日雨がふり続いたその間、ごんは、外へも出られなくて、あなの中にしゃがんでいました。

雨が上がると、ほっとしてあなからはい出ました。空はからっと晴れていて、もずの音がキンキンひびいていました。

ごんは、村の小

川のつつみまで

出てきました。辺りのすすき

のほには、まだ雨のしずくが

光っていました。川には、い

つもは水が少ないのですが、

三日もの雨で、水がどっとま

していました。ただのときは

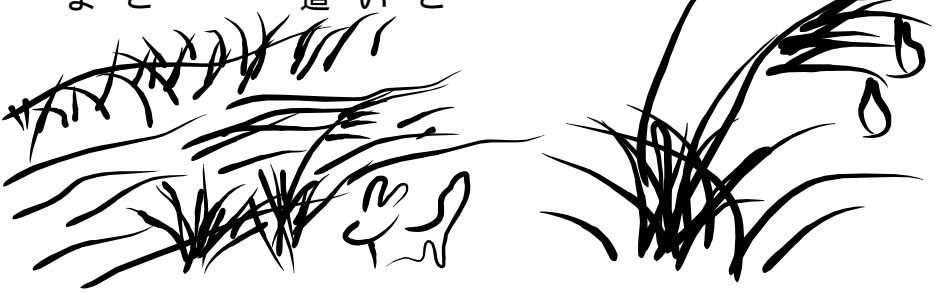
水につかることのない、川べ

りのすすきやはぎのかぶが、黄色くに

った水に横だおしになって、もまれてい

ます。ごんは、川下の方へとぬかるみ道

を歩いていきました。



ふと見ると、川の中に人がいて、何かやっています。ごんは、見つからないように、そつと草の深い所へ歩きよって、そこからじつとのぞいてみました。

「兵十だな。」と、ごんは思いました。兵十は、ぼろぼろ

の黒い着物をまくし上げて、こしのところまで水にひたしながら、魚をとるはりきりというあみをゆすぶっていました。はちまきをした顔の横っちょように、円いはぎの葉が一枚、大きなほくらみたいにへばり付いていました。





じぼくすると、兵十は、はりきりあみのいちばん後ろのふくろのようになつたところを、水の中から持ち上げました。その中には、しばの根や、草の葉や、くさった木切れなどが、ごちゃごちゃ入っていました。でも、ところどころ、白い物がきらきら光っています。それは、太いうなぎのはらや、大きなきすのはらでした。兵十は、びくの中へ、そのうなぎやきすを、ごみといっしょにぶちこみました。そして、また、ふくろの口をしばって、水の中へ入れました。

兵十は、それから、びくを持って川から上がり、びくを土手に置いて、何をさがしにか、川上の方へかけていきました。

兵十がいなくなると、ごんはぴよいと草の中から飛び出して、びくのをばへかけつけました。ちよいと、いたずらがしたくなつたのです。ごんは、びくの中

の魚をつかみ出しては、はりきりあみのかかっている所より下手の川の中をめがけて、ぽんぽん投げこみま

した。どの魚も、トボンと音を立てながら、ごうごうた水の中にもべりこみました。

いちばんしまいに、太いうなぎをつかみにかかりましたが、なにしろぬるぬるとすべりぬけるので、手ではつかめません。ごんは、じれったくなって、頭をびくの中につっこんでうなぎの頭を口にくわえました。うなぎは、キュツといて、ごんの首へまき付き

ました。そのとたんに兵十が、向こうから、「うわあ、ぬすつときつねめ。」とどなりたてました。ごんはびっくりして飛び上がりました。うなぎをふりす

ててにげようとしたんですが、うなぎは、ごんの首にまき付いたままはなれません。ごんは、そのまま横っ飛びに



飛び出して、一生けんめいににげていきました。

ほらあな近くのはんの木の下でふり返って見ましたが、兵十は追っかけては来ませんでした。

ごんはほっとして、うなぎの頭をかみくだき、やっ
と外して、あなの外の草の葉の上のにせておきました。

